

令和4年7月

「きぬむすめ」通信 第2号

良食味栽培のポイント ～夏期の栽培管理について～

J A 晴れの国岡山

津山きぬむすめ生産振興協議会

美作広域農業普及指導センター

今年の生育状況について

6月下旬以降に高温が続いたため、平年と比較して草丈が高く、茎数が多い傾向となっています。

7月1日	草丈(cm)	茎数(本/1㎡)	葉色	7月11日	草丈(cm)	茎数(本/1㎡)	葉色
今年	47	273	36.0	今年	73	486	39.0
平年	34	227	36.2	平年	56	326	38.7

良食味栽培のポイント

1 葉色を確認して追肥を判断しましょう！

多肥や追肥が遅くなると、葉色が濃くなり、玄米のタンパク質含有量が増加することで食味が低下します。幼穂形成期の草丈や葉色を確認して、追肥の時期や量を判断しましょう。

表：「きぬむすめ」の穂肥施用例

施肥体系	幼穂形成期（出穂 23 日前）の生育	施肥時期・施肥量
基肥＋穂肥体系	丈が長い、色が濃い 草丈 85 cm 以上または 葉色板（カラスケール）4.5 以上	施用しない
	丈が短い、色が薄い 草丈 85 cm 未満または 葉色板（カラスケール）4.5 未満	出穂 23～20 日前 窒素 1～2 kg/10 a
一発肥料体系	原則施用しない	

※一発肥料体系でも今年は6月下旬以降、気温が高いため、極端に葉色が落ちる場合は、穂ぞろい期までに追肥を行う。

2 適期に病虫害防除をしましょう！

今年の病虫害発生状況について

7月に入って天候不順が続いており、葉いもちの発生が見られるようになりました。

6月時点で、赤磐市の予察灯におけるアカスジカスミカメの誘殺数が過去 10 年間で最も多くなり、斑点米カメムシ類の発生が多くなると予想されています。

いもち病、ウンカ類、カメムシ類等の主要な病虫害を防除するため、基幹防除（穂ばらみ期、穂ぞろい期）を適期に実施しましょう。

主要病害虫の例

〇いもち病

- ・ 穂いもちが多発すると著しい減収となる。
- ・ 出穂時に感染するので出穂前の防除が必須となる。
- ・ 葉いもちが伝染源となり感染するので、**葉いもちが見られる時は穂そろい期も防除する。**



葉いもちのすり込み（左）と穂いもち（右）

〇トビロウンカ

- ・ 多発すると収穫期頃に坪枯れになる。
- ・ **基幹防除（穂ばらみ期、穂そろい期）を徹底する。**
- ・ 株元まで薬剤がかかるように散布する。
- ・ 穂そろい期以降に多発する場合は、収穫前日数に注意して薬剤散布する。



トビロウンカによる坪枯れ

〇カメムシ類

- ・ 乳熟期以降に穂を吸汁し、斑点米の原因となる。
- ・ イネ科雑草に生息、畦畔は出穂 14 日前までに草刈りする。
- ・ **穂そろい期に薬剤で防除し、被害が多い地域ではその 10 日後にもう一度防除する。**



斑点米カメムシ類

表：防除薬剤例（JA 栽培暦より）

	穂ばらみ期防除（1 回目）	穂そろい期防除（2 回目）
液剤	<p>ブラシンジョーカーフロアブル 1,000 倍 液量 60～150 ℓ / 10a 収穫 14 日前まで</p> <p>+</p> <p>バリダシン液剤 5 1,000 倍 液量 60～150 ℓ / 10a 収穫 14 日前まで</p> <p>いもち病、カメムシ類、ウンカ類対策 +</p> <p>紋枯病対策</p>	<p>ビームエイトスタークルソル 1,000 倍 60～150 ℓ 収穫 7 日前まで いもち病、カメムシ類、ウンカ類対策</p> <p>スタークル顆粒水溶剤 2,000 倍 60～150 ℓ 収穫 7 日前まで</p> <p>又は</p> <p>トレボン乳剤 2,000 倍（カメムシ類） 1,000 倍（ウンカ類） 60～150 ℓ 収穫 14 日前まで カメムシ類、ウンカ類対策</p>
粒剤	<p>ゴウケツモンスター粒剤 3 kg / 10a 出穂 5 日前まで但し、収穫 45 日前まで ※散布適期は出穂 10～5 日前 いもち病、紋枯病、カメムシ類、ウンカ類対策</p>	